



2024年度（令和6年度）

「第1回 不登校を考える学習会」を開催しました。

2024.6.19(土)

小郡市人権教育啓発センター

演題：「子どもが“不登校”ということ」

今年度、第1回の不登校を考える学習会を6月19日（水）に開催しました。

今回の講師には、西日本短期大学 保育学科教授・学科長の富永 明子(とみなが あきこ)さんをお招きしました。富永さんは、ジェンダーの視点からの女性のエンパワメントを専門とし、子育て支援、被害者支援、アサーティブネスをテーマに、講演・講座、カウンセリング、保育者や相談員の養成に携わっていらっしゃいます。今回の学習会では、「子どもが

“不登校”ということ」というテーマで、子どもにとって、周りの大人にとって「今一番必要なこと」、そして「これから必要なこと」について、参加者の皆さんと一緒に考えていきました。今回の学習会には、加地 良光 小郡市長をはじめ、60名を超える方々にご参加いただきました。

学習会の内容についてご紹介します。



○ 必要な視点として… 「不登校を生きる・不登校で生きる」

まず、富永さんから参加者の皆さんに向けて「“不登校”ってどういう状態だと思いますか？」「子どもが不登校だと、どんなことに困るんでしょうか？」という問いかけがありました。参加者同士で意見を交流していくなかで、初めは堅かった会場の雰囲気も次第にほぐれ、あたたまっていきました。

「不登校が原因で、どんなことが起こるのでしょうか？」というお話では、学力の低下や進学への厳しさなど、不登校に対するマイナスなイメージが先行してしまいがちな実態があり、このことが周りの大人たちの不安やイライラにつながってしまうということでした。子どもの価値観ではなく、周りの大人の価値観（例：「人生には成功と失敗がある」「学力が進路先や就職先を決め、そのことが人生の幸せに直結する」等）を押し付けていることが、不登校の問題で悩む親子関係に多く見られるという具体的なお話がありました。いまま



さに不登校の真っ最中である、そんな「不登校を生きること」、「不登校で生きる」ことの大切さについてわかりやすく説明していただきました。また、不登校に関わる保護者の多くが母親に任されており、「母性神話」や「3歳児神話」など性別役割分業制の弊害が原因になっていることについて具体的な例を交えて説明していただきました。不登校の問題では、現実を誠実に直視しすぎる行動をしたことで、かえって望ましくない結果をもたらし、状況がさらに悪化していく危険性があるということでした。「母親である前に一人の個人として自分らしく生きている姿を見せること」、「自分自身が豊かであること」(→「しほり」や「とらわれ」からの解放)が状況を好転させることが多いです、という富永先生のメッセージに参加者から多くの賛同の声が寄せられました。

○ 不登校の「今」から 何をめざすか

これまでは、「不登校から登校できることが大切である」ということや「家の中から外の社会へ出ていけるように」という視点が重視されてきました。これからは、本人中心的視点でのエンパワメント支援の必要性について、富永先生のご経験に基づいた貴重なお話をしていただきました。不登校という状態を変化させようという介入から、まずは「今」の本人の状態を尊重し、その経験が今後の人生において豊かなものになるような支援が、結果的に状態を改善させていくということでした。参加者のアンケートからは、「今日のお話を聞いて、理由を考えても意味がないとわかりました。“不登校を豊かに”という発想は自分にはなかったのでいいお話を聞けたと思います。」、「“今”という時間を大切に豊かに過ごすことが必要だと思いました。そして、生きづらい社会で自分も頑張っていて疲れていることを実感しました。」などのご意見をいただきました。今回の学習会も、参加者同士でお互いの考えを熱心に交流し合う姿が見られ、大変活気ある学習会となりました。



参加者アンケートより

- 今回、行くかどうか悩んだ末、参加してみると、当てはまることばかりで私の心も救われました。本当に参加してよかったです。
- 自分が思っていたことを分かりやすく文字や言葉にしてもらったように思いました。自分の気持ちが整理整頓されたような安心感を得ることができました。
- 不登校のお子さんが、周りに いる いないに関わらず、学校の先生や地域の方、たくさんの方に聞いてもらいたい話だなと思いました。
- 自分なりのとらわれた「固定観念」で幸せを決めていたことに気づきました。

